2022年2月22日掲載
輸送経済新聞

首都圏旗艦店が稼働

同居生かした営業も

荷さばき場は従来とほぼ変わらないスペースを確保

第一貨物・新東京支店

第一貨物（本社・山形市、米田総一郎社長）は14日、東京都江東区で新東京支店の営業を開始した。同社最大となる首都圏の旗艦店で、大型物流施設内に開設。今後は同一施設に他の企業も入居予定で、集荷の締め切りを遅らせるなど、同じ施設だからこそできる強みを生かした営業戦略も展開する。

（小林　孝博）

東京支店の新築移転は、東京、埼玉での社宅の建て替え、山形支店の統合移転などの大型設備投資を行ってきた「東京プロジェクト」の集大成となる事業。新支店しゅん工に合わせ、営業本部も同一敷地内に移転し、7日に営業を開始した。

所在地は江東区塩浜1ノ2ノ2。大和ハウス工業が開発したDPL江東深川（総延べ床面積約13万8160平方㍍）のうち、2階部分を区分所有した。専有部分の面積は約1万8500平方㍍で、東京支店の事務所棟は約2770平方㍍。荷さばき場は5960平方㍍。両面バースで、運行車59台、集配車24台が接車できる。自家用給油スタンド、洗車場も整備した。

配達は、旧支店と同じ、千代田区、中央区、港区など都内9区と千葉県浦安市、市川市を担当する。1日当たりの発送トン数は約700㌧、配達トン数は約260㌧。当初の車両数は181台で、現在進める集配の内製化の進展に応じ、台数を増やしていく。

出発時間などで柔軟に対応

7階建てのDPL江東深川には他の企業も入居予定で、今後は営業本部と共に、同じ拠点を使う強みを生かした営業戦略を展開する。具体的には全国発送や都内の配達で、集荷時間を柔軟に調整する。要望に応じ早朝・夜間集荷も手掛ける。

ドライバーや従業員の働きやすさを考慮し、新支店ではさまざまな工夫を凝らした。2階への移動は専用車路を用意することで、スムーズに車両を動かすことが可能に。大部分は屋内スペースで、雨や風に関係なく作業ができるようにした。施設内には食堂に加え、男性向け、女性向けに分けて仮眠室や浴室などを用意。新支店と社宅をつなぐ送迎用のバスを運行させている。

災害や省エネ対応でも特徴を持つ新東京支店。米田社長は「旗艦店として従来と遜色ない業容で近隣に移転できる上、ほぼインドアで風水害に強いなど、顧客向けのアピールポイントが多い。全社一丸となり、大型投資の効果を早期に発揮したい」と話す。